

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN

繪本月宵物語 九

13
3154
9



13
3154
9

福富町
市川兼次郎
三丁目

月宵物語後説卷第四

本鳥山の黒髪

江戸

桃華園

著



ま春小春あくま小牧でひとうひの草木寒あひの上り下りあひて
戸牖完かくさむよ枕て樂め紙あくなを牛ぬしとてす庵を
對ひの賢者へ更ていづよりの聖人多く御歎ふくらむ者へどく
く食はてまぬる者へまへあらう其故にふとよ又金銀ての物ハせのま
門をもくろみの寶はて家をかき浮き骨も集めたくつゝ其の外
小あざざるあらざれ古人の訓よりまぬる者へからいどんほじや
一ト懇食邪見すり懇食邪見すあらがはしたたかとあらがる
とくア無きばげき言葉をあごそらあらじ思ひとくまちとくわらふ
中たんぐもしがまえふせき志をすうふをまき半小あらざり

ひとのころは紙扇をめぐらつて寶とひそめり候。今と毎年の二月紙扇と
そよごくちの手單とをもとし。されば遙々消息をうながして其を會る
者へかうべく宿をす。ゆく半速うなづく小住の長者。今のかれへ
小住何うじて半の手仕事でとりとものあく不自由う手が
べから祖又の無事でないもとを仰り得る。身上より人の思ひ和業
其血筋筋る者あらず。りひ妻の志相を感得て慈愛うやうやく
が成離をなさん。終く小ちよがまと恨を絶み伊波亡一被をか
りて大綱長者がおどりとも重は小ちよ城主をもつてのうち玉井に
空くとゆく。さやまくとゆく。まくとゆく。あくとゆく。室ふや天井
室ふやて墨子牆と下すはよとゆく。きあくかくて圓圓の御
縫者か遊ゆる。かの長老のかの發信を牛の角小打け善光す。
月未うれきをあ身もま帰りをひしてかのい寺の門前からうの仕掛と
すうけほこの糸続れども幸あくまと免れむ者の人見る者皆者
とあく牛小ひれて善光ちまうと今の中までひつひゆへと車した
う。ぞ詰り牛極まく難原の諸村する寂美の善光。女房タヌ義秀
病次第。すうて聲の氣をとどめ。かの牛の角を打てて善光す。頭と
おへよ及べど襟先個毛をぬりて身術毛と前小嗜毛とある
前のかのもの廢をあして善光若じ牛の當られぬ因情うか
今。早せんがうづきて其侍は打樹象を告げ打よりの初。小松外か
くもと二月はて女房。絶命れひ死よれ。うが死ふる。胸の内
の夜よりねの前。がこもあく年。あすて女房が戸の血を吸ひ
れくよびうて氏庭に入り。家よもじ遙か出で。後軍小通ひの

是城隈（がく）が故（ゆゑ）ふ人々（ひとびと）を殺（ころ）す者（もの）あり經（へり）て
きうむおうの小經（こぎょう）食（く）五丈堂の上人休室送士（とや）其大徳寺（だいとくじ）小勝（ちか）せ
むそ一ノ居（ゐ）が正体（まさたい）れ尚（あつ）し伝濃（だんのう）芋井（いもい）の室（むろ）正證庵（せうけいあん）とつ寺
院を領（りょう）すおひく依（より）て緒画（しょが）通（とお）の形（かたち）正身（まさみ）殺（ころ）十人を連（つら）み
仰（あお）一宿（しゆく）の幸（さい）ひめ（ひめ）せて要（う）前（まへ）の退（しりぞ）行（ゆき）念（ねん）でしもまよ
きうふりと安（やす）くと織（おり）ひきのいかの悪（あく）舌（した）をこぼち（ぼち）たるよ一社
を創（つく）りて貞紙（ていし）納（な）だまひて後々（のちのち）翁（おきなわ）が赤葉（あかばな）稅（ざつ）の十金を授（は）けられ
往（むか）又（また）老（おきなわ）と緒弟（しよだい）の書（か）寫（う）せられし御手（みどりて）拂（は）毛（け）を
ほめらるふ前（まへ）へれり（へれり）出（で）ぬき（き）ども人（ひと）を岐（き）り事（こと）の如（ごと）く
の有（あり）ゆすへ彼（かれ）が因果（いんが）のむどいとつへ中（なか）く一をもとすと解（わか）
を一曲（きょく）の口（くち）をもと取（と）あが減（へ）されをぬうび女（め）の因（いん）の者（もの）をねきてうきが
七歲（しちさい）をあづえまこと前（まへ）の儕（とも）切（きり）る黒髮（くろがし）と集（つむ）め本（もと）もみのひもに
ひも意（ひのい）小野（のの）むらの事（こと）あくふばしてから業障（ごうじやう）のあらわ徑（へうきょう）と過（すぎ）るとか
を一曲（きょく）の口（くち）をもと取（と）あが減（へ）されをぬうび女（め）の因（いん）の者（もの）をねきてうきが
よつての協（つき）河（か）築（つき）れ石（いし）ケ月（つき）の追（お）縫（ぬい）を遂（とげ）て後（のち）又（また）二櫓（ふたやぐら）の祠（し）を建て奉（まつ）れ
社（しゃ）と齋（さい）とが女（め）の御（ご）も一時（いひき）消滅（しょうめつ）して庭（ばたけ）も空（すき）もととと
念（ねん）ふ作（つくり）せ有（あ）りむ一村（むら）むすびて聖老（せいろう）が長（なが）と始（はじ）めて御殿（ごてん）量（りょう）城（じやう）國（くに）下（さへ）す
殺（ころ）せむる者（もの）をかくらむがむらう事（こと）無（なき）りかくらば後（のち）くよ
そつて樹（じゆ）の祠（し）を建（つき）て長老（じやうろう）が長年（ながとし）の追善（ついぜん）して前（まへ）の社城邊（じやうへん）
とへり多（おほ）くねが高（たか）く村（むら）むすびて聖老（せいろう）と委補（いほ）綱（つな）記（き）をも傳（つら）す
ひもうの事（こと）は後（のち）の繫（むす）のものが遠（とほ）く傳（つら）すを刻（く）す

寄樹宿の邊雪



物語

日

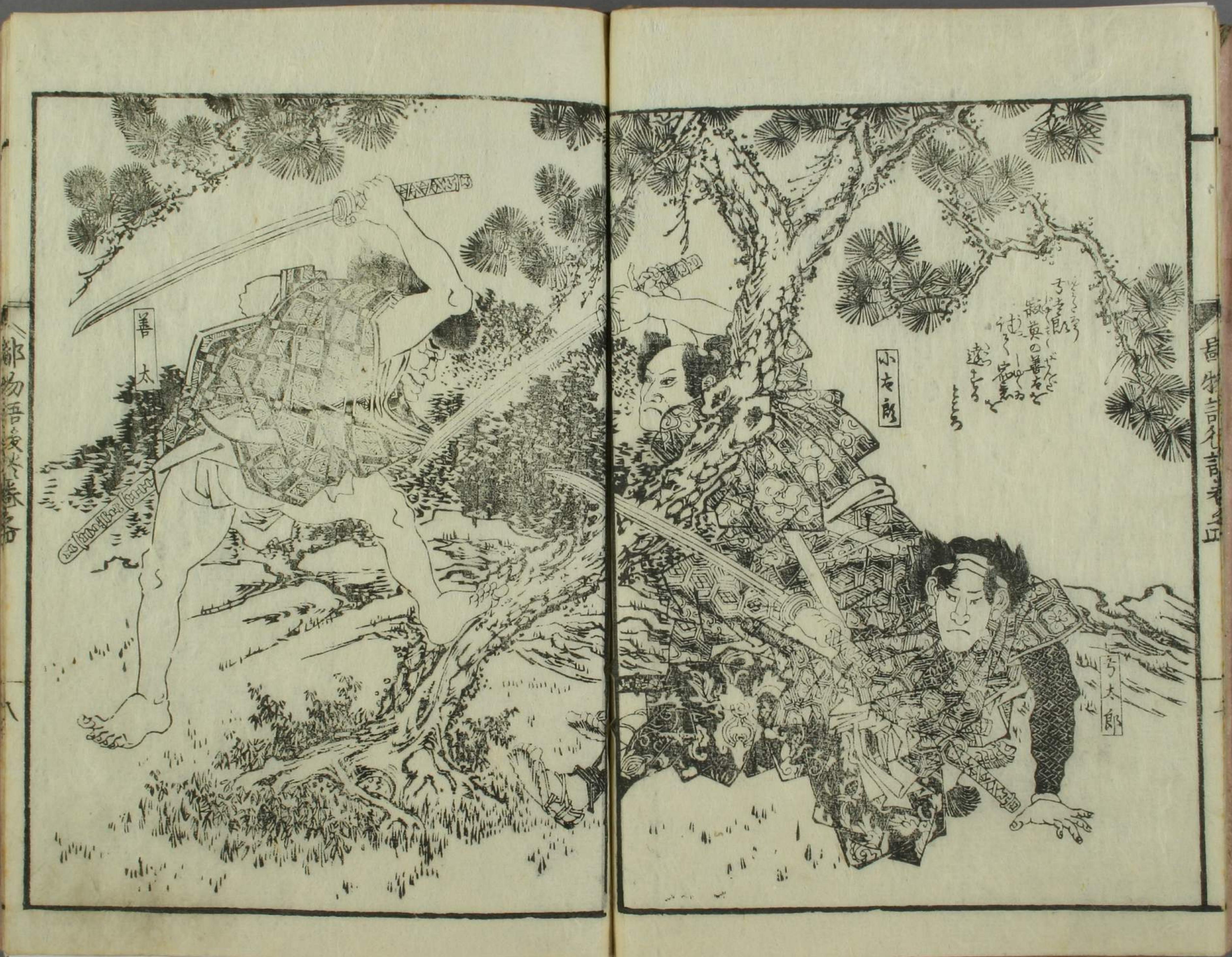
あ
る
事
な
い
銀
子

ラ小まと寂莫村の善人へ家めが死くると死ぬをすねむる金ふ
ぐは捨てぬ狐きりたとて金銀吸ひて口の物狩のれ不
もしおは体空送子の教化よりてうやうする洞いもと達
何玉とりきまほもひらぐ小休屋のゆ代えらともひもとて残り長
者う家のまとあらが葉耀るよ徑をひれぞひうふもとてうもと殿をあ
きゆふーれよほとそとくあ生の引もとと銀生青圓をかす
出で典くとれを多見るん堵して善ちへばととらと安くくみけ
ぐ仕をぬまびよふく大金をゆう半あきハはむせふば甚金の
銀ふるまほもと思ひゆどいほれて長者代は算さやと喰暮ふ
を祀りつねどうがくよけ經嘆するハ福壽歎う海せ歎く體終のと
しのひじくふ裏はあるはと人のつをうちらのへんお定りて用達つ
る長者うえ入る事ゆひよそはまうゆくとめぐらんくふと詠き
つるが長者が家へもとと我らのふ始むられまう比翼鳳切く全
ちくを財切くするも不景のつ傾斜すすみ半もとちういゆ
被とひ景とひはまくとまよはまくもとく半のたるもあくま
あちうまれのうな行院そとをうがる半もやあくんときくと黙業
をめびじつともくとよせ者もも頃多く集らてそ代相原つらう
みけきて西小の通をうかへ海南の通路へ上向金寺のわくと
繩細うせて互にお湯清食をめちくまもり行ひとめ方より挿て
付あきいと放物を放の付流あくとてへは挿むるもあくま
と先うる集えう者めりよひくまの洞六むくよ感の市鷹を壁をゆう徳
能うもの桃八追分の馬七うまの洋の軍を寂莫のかの御まほの

5

育ちそれらの悪業と始めてうひてやを食まいとひくせ
づあるべき奴をもと人殺四五千人をかゝるにしてやかくよば
れり長者うち城で待てうあらみ城邊のまにね御破すを候
は國海中の銭賄賂の徳納とのいれがつ日へ弘吉うとと國
安樂余りきま定アラシがいはたとおわくぬとばくまくと惡者若
入み密に機知がよよ枝の女忍あをとあくと瓶籠を包み
待候もるをもおゆきあうれをね海中の女家めいふぶふこの
よみまうれと是事耶とたまくふわくもいち前つしとだらく
もくまん精青眼と眼とあるのみふしもあくとく海中家財と限と
織の絹とあらがり批量もとく長者御附称と之とくの寂
莫村の惡後善をねがあざと遠くをもかうやあぐくにありひ
去がくは樂入きの通とがよもあてるねわが不調ほのまくわ
うを貪うをくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
ちひて女城あ人よめし茶をかげて夜半小豆浦をぬけ出で川中島に
あうゆゑとし船人を食と是れに通すて甲板へあぐきおきふみど
でくへ迷うつるをくもあかくねびのとも含み小舟をうきひをまく
す鷺うそ鷺ふと耳にあえ牛を鳴らすまたよせまねくとくまく
えど城の長者とくのむかじの徳ナシばくまくまくまく
候うくよやとくがくもよ我とくつふ更にあくる事のうけをばく
半領主とくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
徳きくねハちう竹打のよかあるきんの育ちとすが今ハ行院のまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

ととほてまゝざらぬうのを行つうとを在へてとぞじうく打たうつを盡
て小徳の處とつむだうかくて小徳の處よ事かの育ちてよけうちも事う
て善を爲ふ小煩骨あれ眼にまうど冥やがめもももももももももももも
を能ひかれてをもじかれて酒にまうとはあればとまうとえすも傳さん
を終骨の狼々まよひよんるト事のくよきくまきをもと長者が人の
まよと季一ノはて主をれひよして小ぬおじき出で人々へせぬかそようの貞
よ恵をもとをもととめの白ハ序つて長者う家はあいびゆふりあうのすと
かうりをはくわきもながよかなるあくべんをくぬ軍手出で付く
捨きかね入のまはうげゆくあくべいもふ約約う志咽す小仙人
あうとばすまきへ用意の装束一文料の御湯の山の難引筋とよ
しらよ無事、御来を定めて生を遣つてつうぬ小多歌ひとのも念の安らぎて
まくまく小徳の宿よねじりて例の肩ちがふつるふ要經ともまくまく
て情うちあるり所とて出でやするハ本る正日へ吉向じて極壽殿うの裏入
く室すうるふ伏屋の長者あづの牛成もうあづうて金納すのまも
あづえ未嘗す家はう事と御前の湯のみれりと行ける人ひ見ひも出連て
うれで仲間の中カ帶あるひとまぐで都合十人を忠ぐまがまくと
附きせうされどもかうじ出立と幸る者多くは仕様て六事会うる
頸まくねがうじ事とあるあづれが集うてすゞ數も多きを少く
き一事のうな多めにびうれじと傳へゆう小邊のこそ其運をひくと残
時節そそごううれす御出うそと呂付みせはとせむの長などを
腰みまくよと見づくと車んよと風流うげつ月せり笠うちうがうて
小ち能と歎み引くと引取の湯のみにて多かばうけうがうくとせむ

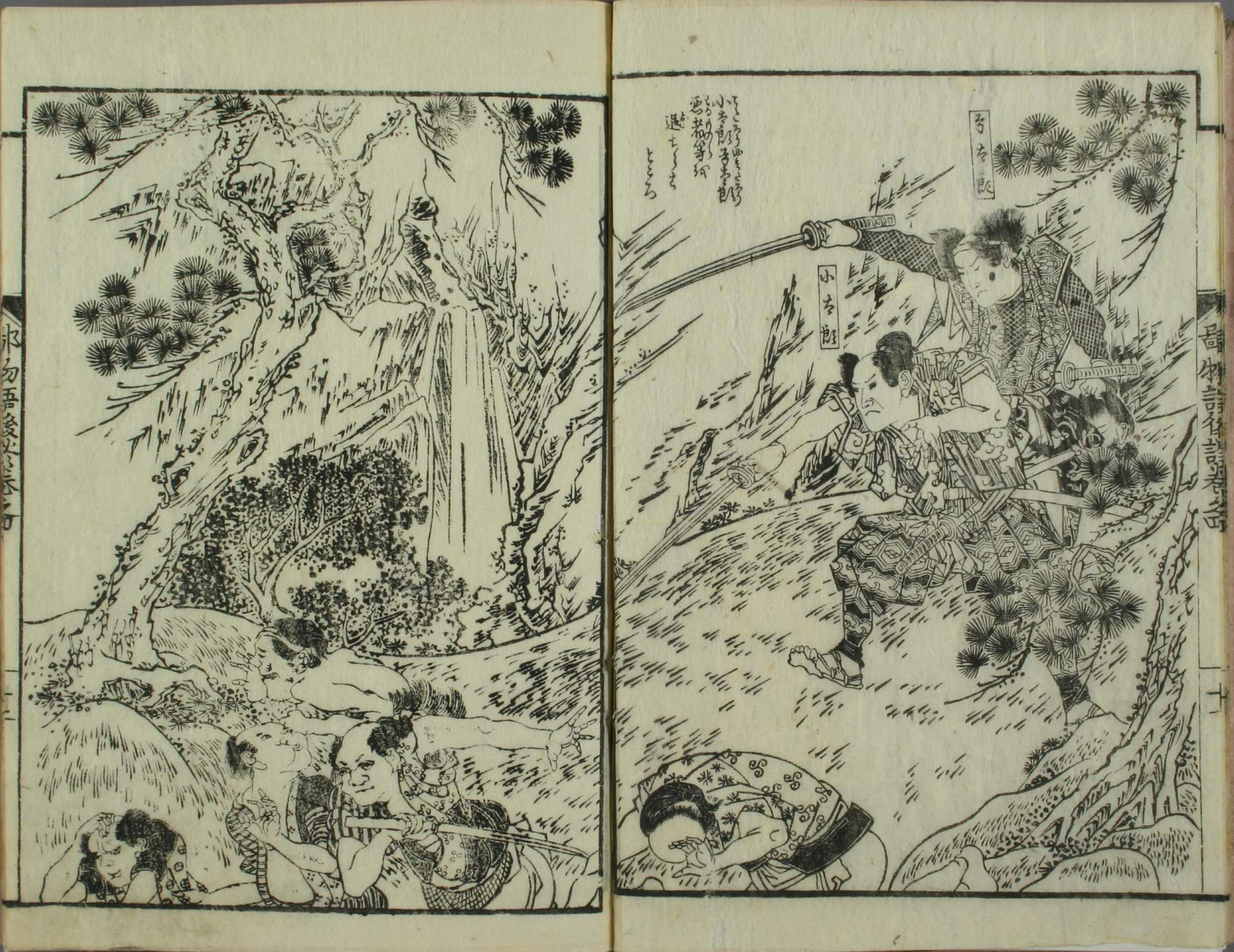


主すへ何にて長者あはへひるをもとよまれどよきあつぐ家
主せんとへきとれぬ庵きる程もゆきひそをゆわてつねきくらめ
叶ふとまづく腕を切く途へ更いもうたうの枕の款二よハ毒つる經長
者を我得く捨て故とゆふくふうはゆて災の根りもちたく三
ツよへ駕あが家の代次古とり者家をのりう長者が毒を妻させ全ての
物の筋を處すも男なる身のなまあゆく極めなまくしきがひらみ
人のあゝほへ何とぞ見事な仕事せまじや今もこそ人をつんざへ妻ひ
天送下う長者らが金所を手なびとめのとれりふるうえくふむたつを
小ち駆らと收び笑ひかく花すとまばくとてその日の晝の未の刻
あり小浦く外の湯れひすり蘿小とそへあくられく小湯のゆのとづく
とこういゆき
居よる附とりゆすありゆのととゆして常へてあつらうがけすりもぐ
きよ湯の山の氣とひよほーあつる川をよみそ小物をかけうるもあ
酒るどまし小石あり小ち駆はりとすを前が傍人を頼けさせをきく一生ま
うみうがけ小門のまつりてへ入るひたゞる程を幸町がりと河原
ひとよのがれがれ湯の山のかへりがく又へ五重の程も至日月の
牧よつてゆくをべきねへひきもほくのわことを喜ぶれかじきがじて
付ももさきわきとあひひ勝へ山店す善ち成ヨモセモトの者をすら不
きよ長者がひりうかへりあらんとすをとひる家よりすうあがく嘗え
一あくまど個つ一所をかゝりのと巡りせりの村や里人をかくを
たつてあひ樹を折りそも御歎嫌をもとせつて遙ふを食のとくとく

まく町まで行ひて十五人で上りて合ひるハ善方城と云す
やうに角をくりかじて又一町を下りてむづへ行あひ河原のつす
ヨリて長者を待候する神と城を下り小豆の河原のつす
を城もとまへて見物たまへ候く善
えひく城城と水の邊にありとうとうれりてと立ぬる
ちうきの城へ候今をもと町へうもむけり事うがゆき能くも
居て借人を壁と打樹するやうをせて破きる傍様を捨まし
やう死みぐりと年々借人の持る衣類を磨いて腰さこの大小を乞ふる
上着の金糸をもとめて借するばすりんへつらとをうとうてやむを
汝を付ふるふくらはるる事うがゆき出でる病よと西ざる
變れど室に是あつてん快居の長者もが一ふすを貰ひきりて
抜科寺そりう死ひまする途臣をとく未練つんほひ又を含み
爾とたむかう出せハ松葉殿の内閣小於く縣の小ち貞忍殿とし者たり嘗
のうみをりつてはるる仇討の見ゆつて己をがるふの少慶よおと文を付
る一束紙のう事常よ拂面せよとみやのうれ寂莫景を美儀よ及び
首ふねやうと立合て候けたゞをひは十すよ暮て狐狸をよふと
きふるゆゑやく花船とくまうなが何もひんまうと是時いふ事
く己れが親を付く挂る松葉殿をかね遣ひましるの妻小不満ひろき根
寄まつ所く付るうわをがくく山歌ひうかく痛者甚あれとす
下の業ふむじてよどしけどせら失ひ見ゆるを氣味しきとては思
と少吉殿ハ外のとてぬをきにほまく待つける紙をハ子をがむ
を思ふゆきはゆくからぬゆくや無くわすか火中火をうき切縫

たといえども身の行為を相りとまじあひどくやが
るい處でうそを貯へてはづたまうゑくらをかみ刺し切れるさうみせ
猿の下に振るふを取ぬをひきまとまよとまえがたのよへり持てまつるの達
そうち眼が頭をして圓をかくもむくへ配をくほすをひづくるも餘
善き石の足をさぶれ石煙草を倒せぬとまくどあふをうぶなりまち
金小刀をくす骨を切る人の力から紙小を取押しあすやせうへ持て待を
よみつとくや勘合をきくを縫むよびとてゆるてけとまくより我
買の役をれむれむとげぬけとども一力のびに身の里義和をめいたの里と
切人をめくわよむとたの里義和をなふ善きハ申と説むだるがゆく
眼をひき手をあくろは見そ柰ふ宣経(佐屋)の長者うき貞又代
仇を付すとぬばあうれを悪者どもちうくは消うせて松井どの
通すみちうふとかがうむりり

井伊の五句



仁義礼信孝順忠節の達人達人と爲りてあまがちを滅
ちとくもそめ教誨教誨してりそと羅羅ハ惡惡も又惡惡もさりとれど
其人をかくまうる事事のう術術をして且まの達人達人と又人のあるとて
孝孝は止止人の居居てハ學學は止止とて君丈君丈の仇仇よ天天をひきうるが
男男なるより常常あるがむをゆうる名名が退退くも是是天邊天邊の遙
きれむ是是らてハ只家只家にあきて紙紙を纏纏ひて裏振裏振切切の御御ひとつと、
爲爲ふうべと毒毒の小仙小仙と後食後食ふすびと文文の追若追若御父御父の繼繼母母の
吊吊ひとへ善事善事所所する供書供書かくく善光寺善光寺の御御常常燃燃油油をまわ
香海香海の走走煙煙をかづてよそく漏世漏世の迷圓迷圓飛飛とみばあやねく其其の
の法雨法雨をこうじて枯渴枯渴の丸薬丸薬れしらうらむだまへ阿彌陀阿彌陀世世を等等に

深き深きぬぬちうひうぶぶりとて大桶大桶をもともととて一蓋一蓋の煙城煙城ひよひよ
まもも金金を善光寺善光寺をもともととてうぶうぶりと小寄宿小寄宿とおる鬼王鬼王法師法師と
通通入入署署布布緒緒をもともととて下下車車紙紙せ預預けハ富四方富四方小柵小柵をもともと
緒緒の綱綱を佛佛の御御手手と繋繋べ卒卒の卒卒都都壁壁割割せて端端の邊邊海海拓拓す
し三万三万余余人の修修福福を傳傳すて善始善始の花業花業消滅消滅せんと云願云願いつま
云云の諸諸佛佛をもともととてはうへ表表ともも也也てやうへ走走とて時時は建磨建磨元年
幸幸まの年年三月十四十四日日と年年の大施大施無縫無縫紙紙を行行つて方體方體修修芸芸を
ぞ持持えりうそひいの不思儀不思儀すう半半ううなは長者長者が傳傳芸芸をもともと
一束一束煙煙の紙紙とハ壹枚壹枚四斗四斗の移移すや紙紙をもともとてさんを四つわく四つわく一束一束ふ
とて煙煙の紙紙を裁裁こちて煙煙紙紙をほしてりそと一煙一煙と室室をそぞろその

光辉にて、童子の内が照し、神龜堂にて、光明を照す。是
が院山のかつて、文字のゆれ、勒とらふる景が、もぐれし、と月光
がうつる。と、おもむきの、火あつたるが、先地の雄
ゆまうて、明眼する事の、多め。あまが、見る人、見ゆて、他人に
詰、何者の借業せざる事。うる希も、うりしき一雄の妻成妻。
く辱ぬるふ是へ考ふ。剣術が、めのむらが、また、送る死起して、善光寺ふ
常、塘、鳴、寄、附せんと、も、名はづの、おほて、うつて、長者、が、從文、るる。
平と、うみよの、金錢、うがひ、れ、板起て、後、よ、生、木の、悪、金錢、うを
て、死業、が、ひきいどし、畜生、道、よ、墮、死、り、も、妻の、ゆうむ、うが、金、化、三時
の、切、か、ふ、よりて、業、圓、を、裏、て、天、上、ま、生、死、けんと、た、ある、五、剣、術、の、文、が、赤
ま、毛、毛、絹、け、毛、か、う、ありて、鶴、の、圓、の、轄、角、と、か、ま、ひ、無、室、の、東

狂をうけし林庵より縁りを遙もじひは靈廟中音よまよし圖摩室の
ゆきよへぬけし事よありぬよ奉れさし半身がみあひひをかくぶらぎく
えん豈よふんのうちす含せてまたの退善佛事よがと多めせがふむ
かりの志し紙相又家よ光をかくびて佛事よ佛事よまくもあじと
げやどね着いどふをほのゆうとあつてそこゞの靈廟をたまつま
スケ善光寺のひあふ燈よ一燈をまくしよりせのく後く子代
を城じひつてやうじて林庵の養老がる燈とくの善光寺のくわが
る實女がる燈よへあうまぐとそのくわがくは室やうくは業までまのせと
もかくうばくとくをく徳ひとく死ひて物のをもつとんへ大む贋め
ちふお色色よはひ佛と因縁りまくしんでニ対の業障あつと
りふけよひ忽ち小退散せうと詮せたずひにゆは室よにそ教説の

まきとあすて殊ふ小ち貞を齋えりてまも源
せじてあくへの裡をも抱えせり也とがくがもそれとハ累ふらび
まうこびまくまう取れにても口外よけをわづらびて
石竹るがまをかみよ鶴の山中もあたとゆ行そま
む聲もくはな教むるのきいきなあへれどもあたとゆ行そま
きのつはとゆとゆき我のやまと紫の羽ひゆだくばしてまも家の
志ぬりくぬけせしもく年ひくがるへ我あゆ食ちあひゆか一て聲
がんをよひづきをて忠義義のくほくをだ家の若らわが志ゆ
ち輩とまくゆふとくのくちうて夕方がなへを西今と云
ひとよしとよぎ顔とおもてのうめりと有能うりたまざりありもう一
ま花咲とりよのあくて二人の弟子が持るがまくへ駒嶋義常



珠より鶯冥溫厚の生れうり一人へゆき持かせじにて分て惡念有りと争ひ
たかひ人をあらも人を偽り人のねばぬをもる半參りあまごす花明正成
ふほひふもひてそこをく候ひつひもみけむとてすくめられわいよく西邊櫻
しらう枝をも人の手る見う桜をやるふれ要折はひて甚しきのみあづ
かて附のひゆふ纏をもみけまくすすまうせんかくじはくすく草つと
やそ草手をもひて早くもあはせ遙よ入るべと審へよめめられむと篠を
りゆく友の顎をたゞに疵を附え見守ふまふほきじゆく脚蟲よしよ
て岩ノ山が生れよ及むざるをもうりたが城よりとて御者もとてとすぞ
うれむる者ちによ憂ひうき絆く脚よむくしてやなすせん君
望がく等を要候をもうがけたまふまむむの難とまくき事わざも
且々よあぐべきるにすがあれへひこすと我よりもぬぬやうだ

数々とやかをだるまを其のうへ主徳せりあらそひ悪人を殺
て善者とひしもとが我家の事より今無念を悪まと持つてゐ
るがゆくすまつてよしかくほじ候て我時のあるふかれて是を教つ
ておとおり又今かきがねたまめ追坐（とくざ）ていたまちまち刑代をうくる
ことはあるありて我例（わががた）あるうちもの爲を我あぐきひき替
えぬうべと見附るありまつてありて止とあがむとれ
波よいと角へはなれとも彼と善道（よしぢ）に入れるうもんわが例（わが
らしきはもや何の國（くに）かくもくろく人の業（わざ）をくみよひくべられ
わが例（わが）もありて肩のくさりとてそれを擧てよう悪人太い威（けい）
多ふやと説くと悪人死ひがてて善るはたちうじとぞかづやか
が身代をひしきある体面の長者（ちやうしゃ）がこの身のうちある且つひじ

き幸ひて有難かり候とぞもう

月夜鄙物語後説卷第四終

